
球根

たいしょ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

球根

【Nコード】

N5934S

【作者名】

たいしょー

【あらすじ】

このお話は「フィクション」です。

「痛い表現があります」

タイトルは「リストカッター」と悩みましたが、生々しい表現過ぎるし、希望が無いので、「球根」にしました。

今、流行の小説みたいに痛々しいですが、希望は残したい…と思う…。

拙い文章ですが、お付きあい頂けるとありがたいです

たいしょ

1

当たり前に愛してくれる人はいますか？

この質問の「当たり前」の答えは…「親」でしようが、ごく稀に「愛されない」ことも…悲しいことにあります…

そして「当たり前」の愛情をもらえなかった子どもは…「壊れる」ことが多い…

…世界はあたしを見ていない…

…独り…

あたしがいじめられた原因は簡単だ…

「うまく笑えなかった」んだ

「なんか、アイツの笑い顔変じゃない？」と、クラスのリーダー格の奴が言った、簡単なその一言で「世界」は変わってしまった…

次の日からは、クラスの全員があたしを無視した…

教師も自分の保身ばかりで、「あなたにも原因はあるんじゃない？」
と言い放ち取り上げようとしなかった…

でもあたしは、泣かなかった…

親にも相談なんてしなかった…

なぜって？

泣くことは許されていなかったし、「親」というのはただの「記号」でしかなかったからだ…

あたしには、「親」はいない…いるのは一匹の「メス」とそれに群がる「オス」だ…

だから、あたしには「名前」という拠りどころもないんだ…

だからあたしは、「演技」を続けた…

親の前では「良い子」のフリ…

学校では「空気」のフリ…

ただ、あまりに反応がないから、つまらなかつたんだろうね？

標的はよく泣いて、わめく、他の弱い子に移ったけど、「同情」はしなかった

そんなのしても「意味」はないし…

ただ、あたしは逃げ場所なんてなかったから、早く大人になりたかったんだ…

そして、中学生になる頃、あたしはもう「ヘン」になっていた…

感情の表現の仕方が、わからなくなってしまっていた

「1+1」の答えもわからなくなるくらいね…

家庭では「DV」なんて生ぬるい「虐待」が日常になっていた…

毎日、理不尽なことで殴られ、泣けば、また殴られ…

反抗すれば、やっぱり殴られ、黙ればまた殴られて…

傷つける相手のいないあたしは、大好きだった「人形」を「傷つける」ことで、バランスを保とうとしたんだ…

…髪の毛をむしりとして、腕や足も頭もはずして…

残ったのは「イモムシ」みたいな胴体だけ…

あたしは、そこに「心」が入っている気になって…

カッターで切ってみたんだ…

あたしと同じで「空っぽ」だった…

同時に背中が冷たくなって、なぜだか泣いた…

泣きながら、急いで開いた胸を、糸と針で塞いだんだ…

#2

…あれはあたしだった…

イモムシみたいに、動けない「あたし」

胸を開いても「空っぽ」な「あたし」

とても無惨な…「あたし」

ただ、あたしは繰り返した…

傷つくたびに、「彼女」の胸を泣きながら開いた…

そして、また縫って…

まるで傷をそこに閉じ込めるみたいに…もしかしたら「心」が見つかるかも…なんて期待して、落胆して、開いて、縫って…

…そう…

あたしは「あたし」を傷つけたんだ…

「イジメ」の標的から抜けたあたしに「友達」ができた…

家庭がうまくいってないあたしには、その「友達」はとてもありがたかった…

そう…「依存」してしまうほどに…

…「信頼」のうち「信」より「頼」に傾いてしまった

そして小学生の「友達」にその「重さ」を受け止める術はなくて…

また少しだけ一人になった…

そして、中学生になりあたしは、少しだけ「くれた」
正確に言えば、「普通」から少し「はぐれた」

だけど、少しだけ救われた気がした…

少なからず「痛み」を抱える「仲間」ができたからだ…

その中である先輩が「リストカット」を始めた…

…流行だったのかもしれない…

テレビなどのマスメディアも特集していたしね…

ただあたしには先輩の巻いている包帯から滲む「赤」の斑点が、生きていく「リアル」の色だった…

…すごく自分に自然に入ってきた…

あたしは「彼女」をもう傷つけない…

傷つくのは自分だけでいい…

…その痛みと赤…

…生きてる証…

それだけがあたしができる自己主張だった…

#3

手首に刃先を入れる…

「ブツッ」と生肉を切る、嫌な音が頭に鳴る…

だけどあたしは、笑ってる…

もう少しだけ深く入れる…

すぐに赤い血が流れ出る…

こぼれ落ちるのを見ながら「生と死」二つの相反するベクトルが、
ちようど等しくなる瞬間がある…

そう、完全な「ゼロ」だ…

「こんなのじゃ死なない」って気持ちと、「このまま死にたい」
気持ちのちようど真ん中に「それ」はあるんだ…

いつしか自分でもわからなくなっていた…

あたしは「あたし」をどうして傷つけるんだろう？

誰よりも強くないし、傷つきたくなんかないのに…

言うなれば、もう「クセ」だろう…

爪を噛むとか、髪をいじるとかと変わらない「日常」になっていた…

…また、包帯買わなきゃ…

ある日、あたしには彼氏ができた…

すごくいいヤツで、こんなあたしでも好きでいてくれるんだ

あたしの「ヒーロー」

あたしだけの「ヒーロー」

ただ嫌われたくないあたしは、「家庭」のことも「リスカ」のこと
も言えずにいたんだ…

学校も違うから、バレないって思っていたし…

何回目かのデートの時、嫌な同級生に会ってしまった…

あたしは、気付かれないように下を向いて、離れようとしたのに…
彼氏があたしを呼んだ瞬間に気づかれてしまったんだ…

「○○じゃん?…彼氏?」『一応ね用事あるから…』

「ふ〜ん…あの彼氏は知ってるの？」

『そんなのあんたに関係ないじゃん』

「…確かに関係ないね…（笑）」

何とか気にする彼氏をごまかして、その場はうまく切り抜けた…つもりだった…

その日の夜、彼氏から電話が来た…

「もしもし…〇〇？」

『うん今日会ったばかりなのにどうしたの？』

「…何か俺に隠し事してない？」

『…えっしてるわけないじゃん？』

「信じていいの？」

『疑うつもりなの？』

「いや…そういうんじゃないけどさ…お前の学校のヤツから色々聞かされてさ…」

『えっ何を』

「いや…くだらない噂だと思うからいいや…お前に疑われたくもないしね」

『気になるな…どんな噂?』

「いや…お前がリスカしてるとか、家庭がめちゃくちゃだとか…くだらないだろ?」

…ヤバい…誰が?…アイツしか考えられない…

「どうした?声が遠いよ?」

『…ちよつと疲れたから、今日は寝るね』

「わかったあまり気にするなよ?俺が守るから」

4

…頭の中が真っ白だ…

初めての「彼氏」

大事な「彼氏」

あたしの「幸せ」を奪うのは誰？

気づいたら、そこは見慣れない風景だった…

…目が回る…気持ち悪い…

あたしは反射的に吐いた…

何も入ってないから、胃液しか出ない…

…と、そこに走ってきたのは、看護婦だった…

「大丈夫？まだ寝てた方がいいわよ？」

『…てか、なんであたし、こんなところにいるの？…』

…空気が緊張した…

看護婦は言葉を選ぶようにして、思い口を少しずつ開いた…

「あのね？覚えてないなら、思い出さなくてもいいことなのよ？」

「人はね、すごく辛いことは”忘れる”様にできてるから…」

…要領を得ない…

…イライラする…

あたしはヒステリックに声を荒げた…

『そんなごまかしじゃなくてあたしが知りたいのは何でここにいるのか』

…辛そうな顔をして、看護婦は答えた…

「あなたはね…お家で、手首を切ったの…もう少しで手遅れになるところだったみたいよ？これで満足？」

…信じられなかった…

…あたしが自殺未遂…

…なぜか背中が寒くなって、布団に潜り込んだ…

それでも寒くて、手足が震えて…何か、自分の物じゃない感覚みた
い…

…あたしは「彼女」に見られている…

この手足は「彼女」のだ

―そう「理解」した瞬間―

あたしは「イモムシ」になっていた…

…最初は「遊び」感覚でやっていた「リスカ」…

慣れは「痛み」を麻痺させて…あたしは今頃、自分のバカさ加減に気がついた…

そして、声をあげ…泣いた

産まれたての赤子みたいに、全身の力で…

そして泣くだけ泣いたら、少しだけ眠った…

その夜…彼氏がお見舞いにきた…

あたしは精一杯、泣き顔を隠すように、メイクをした…

「…お疲れ」

『ごめんなさい』

「守れなくて、ごめん」

『悪いのはあたしだよ』

「うん…でも知らなかったとはいえ、気付けなかった俺が悪いでも、どうして嘘をついたの？そんなことで嫌うと思った？」

『…あなたみたいに”普通”に育った人には”そんなこと”でしかないかもしれないけれど、あたしには”そんなこと”じゃなかったの嫌われたくなかった怖かったもうこれ以上捨てられるのは、嫌なの』

「…そつか…何か、俺じゃダメみたいだな…ごめんなでも本当に好きだった…」

『あたしなんかほつといてよ死ねば良かったんだ』

5

「…バン」

いきなり耳元で音が鳴った…

「…どうしてそこで意地張るのよ？なあ？じゃあ、不幸に生まれたら、一生、不幸に生きるのか？」

「しかもその”不幸”なんて誰が決める？俺だって”不幸”なことはあった誰だってあるんだよ」

…彼氏が泣いてた…

最後の方は、言葉になっていなかったけど…

…伝わった…

…確かに届いた…

…あたしはまた、声をあげて…泣いた…

やっと許された気がしたんだ…

「必要」としてもらえたんだ

…「独り」じゃない

…そこに言葉はいらなかった…

ただ抱きしめ合って、求め合った…

…初めてのキスは、涙でグシャグシャになった顔だったけど…キレイだった…

…余計なモノが何一つない…

…ただ「二人」…

何かおかしくなって笑ったね…

そう、あたしは「サナギ」なんだ

まだこれからいくつもの「可能性」があるし、何にでも「なれる」

そう実感したのは、初めて抱かれた夜だった…

退院して、少し月日がたち、真面目な同級生には「腫れ物」扱い、不真面目な同級生には「ヤバい人」扱いで…でもあたしは強かった…

誰かが「あたし」を「必要」としてくれる…

たったそれだけで、あたしは「無敵」だった…

そう、初めて肌を重ねた日、あたしの傷に彼は丁寧にキスをした…

そして最後に心臓にも…

ドキドキして、逆に死にそうになった（苦笑）

「これで傷が埋まったろ？」なんて、ちょっとカッコつけてたけど、
実際カッコよかったからしょうがないよね？（笑）

…けれど、まだ若すぎる二人にはそんな「幸せな日々」は続かなか
った…

彼は年上だから、先に高校にあがってしまっし、しかも遠くに行っ
てしまう…

『あゝあ、落ちないかなあ』

「…縁起でもないこと言うなよ、彼女だろ？」

『…彼女だからだよ』

「…わかるけどさ」

…あたしの願いは空しく、彼は受かってしまい、遠くの高校に行ってしまった…

「淋しい時には電話しろよ？」

『…じゃあ今する』

「…いやいや（笑）…まずはゴールデンウィークには帰ってくるんだし」

『そうだけどさ…』

「…まあ良い子でいろよ」

『…浮気しないでね』

「…するわけないだろ？バカだなあ（笑）」

『毎日、メールしてね』

…そして二人は、触れるだけの短いキスをして別れた…

6

彼がいなくなつて、まだ一週間…

あたしはもう自信がなくなっていた…

…やっぱり守られていたんだなあ…

そんな事実気付いても、今はただ淋しいだけ…

毎日メールは来るけど、さすがに電話は高いからね…

その瞬間だけは満たされていても、終わった直後に「いない」という現実が襲ってくる…

…会いたい…

…淋しい…

たった一週間で、あたしの中は真っ黒になってしまった…

でもワガママなんて言えない…

迷惑だし、良い子でいないと…

そんな中、また親との折り合いが悪くなった…

あの時は心配してくれたのに、時間がたてば元通り…
やっぱり繰り返すんだね…

…とは言え、あたしも会えないイライラをぶつけてたりしたから、
お互い様かもね（苦笑）

とにかくあたしは春休みだというのに、ため息ばかりついていた…

全てがつまらなく思えて、部屋からも出なくなった…

彼がいない世界なら、出て行ってもきつと仕方ないだろうからね…

彼がなくなつて10日目、前の夜に彼と約束したから、仕方なく
外に出てみる…

…やっぱりつまない…

彼との約束は「外に出ること」だったけど、どうせ出たんだからと、
久しぶりに街に行ってみることにした…

本やCDを見たり、ショップに行ったり…

でもやっぱり、隣にあなたがいないとつまないよ…

日が落ちていくのと一緒に、あたしの目からも涙が落ちる…

誰にみられてもいい…とにかく今は泣きたかった…

「…どうしたの？」

…急に声をかけられて、心臓が止まるかと思った…

『…何でもない』

「何でもなかったら泣かないじゃん？」

…ウザっ

『何でもないほっというてよ』

「…いや、普通ほっとけないでしょ？」

『いいから、かまわないでよ』

「…わかったわかった」

…変なタイミングで声をかけられたから、スッキリ出来なかった…

…もう少しだけ泣こうと思い、大きく息を吸い込んで…吐いて…

「おい」

…また、さっきの人だ

『邪魔しないでって言わなかった？』

「…とは言われてないけど、ごめんそうじゃなくて…これ、やるよ」

…と、ふいに投げられたのはポカリだった…

「泣くと水分足りなくなるから、それでも飲んどけ邪魔してごめんな」

…と、彼が帰ろうと背中を向けた瞬間に、あたしは彼の腕を掴んでいた…

#7

あたしが急に引つ張ったから、彼はバランスを崩して転んだ…

「…いつてゝ急にどうした？」

…気付くと、あたしは優しくされたことが嬉しかったのか、元々泣きたかったからなのか…涙をこぼしていた…

「…おいお前、忙しいヤツだな」

…と言いつつ、そつと頭を撫でてくれた…

『…ありがとう』

「…どういたしまして」

…ひとしきり泣いたあたしは、一つ大きな深呼吸をした

『…もう大丈夫』

「充電完了？いいね早くて…」

『どうしてあたしに優しくしてくれたの？』

「特に理由はないよ？人が泣いてるのを慰めるのに理由が必要か？」

「…きつと育ちがいいのねあたしはそんなこと、教わらなかった」

「…どうだろうね（苦笑）育ちなんて良くはないと思うけどね」

「でもありがとう」

「何かすごくイライラしてた気持ちだが、全部淋しさが変わったみたいでさ…」

「ああ…たまにあるね味方が誰もいない気がする瞬間」

「…どうしてわかるの？」

「（笑）…なんとなく」

「確かにそんな気分だったんだ…彼氏も遠くに行ってしまったさ…」

「そうなんだからでも遠くにいるからって、彼女泣かせるのは感心できないね…」

「違うの…あたしが弱いから…」

「違うないさその弱さも知った上で、付き合っているんじゃない？普通はね？」

「…もしかしたら彼氏さんは、あまりあなたのことが好きではないのかもね…」

「そんなことは絶対にない失礼なこと言わないでよ」

「…ごめんごめんでもさ考えてみてよ？もし俺が、その”弱さ”を知っているなら、それこそ”絶対”にそばにいるそれが”彼氏”じゃない？」

…何も言い返せない…

何だろう？この人合ったばかりなのに、あたしのことがわかるみたい…

しかも説得力がすごいある…

「もしかして、その彼氏って恋愛したの初めてじゃない？」

『…って言うてましたねてかどうしてわかるんですか』

「…どうしてだろうね俺にもわからないやただ俺が”彼氏”なら一人では泣かさないけど…暗くなったらね家の人、心配しないかい？」

『いや、家は別にいいんだけど…ですけど…』

「…（笑）敬語はいらないよ？じゃあこれから暇？」

『一応は…春休みだから…』

「春休みか…いいなあ」

『えっ高校生じゃないの』

「…嬉しいねでももう20歳だよ…よく間違われるから慣れたけど」

8

あたしはなぜかその人に興味が出てきて、一緒にご飯を食べることになった…

「いきなりごめんな？」

『別にいいよ家にいてもつまらないし…』

「俺も一緒だよ一人で食べるご飯は、なぜかおいしくないしね…」

『それ、すごくわかる』

「…だろとりあえず食べようぜ」

…食べながら、普段なら彼氏に言えないようなことも、なぜか彼には普通に話せた…

それを受けて、彼も少しずつ自分の事を語りだした…

彼は、たった5歳しか変わらないのに、すごく大人だったし、何より余裕があった…

彼の両親は離婚していて、まだ幼い兄弟を守るために、社会に早くから出ていたみたい…

「…だる顔は童顔なのに、しゃべりはオヤジだからさ（苦笑）会社の人たちがみんな、オヤジだからかな？（笑）」

『オヤジとは思わないよ大人っぽいとは思っけど…』

「…それってあまり意味変わらんくない」

『…あたしの中ではすごく違うんだけど…』

「…マジで」

『けっこうマジで』

…本当にこの人はよく笑う…

人を明るくできる「何か」を持っているんだろう…

あたしの頭の中とは正反対…

…と、お互いの自己紹介も含めて、いろんな話を話している内に店員の「早く帰れ」オーラが強くなり（笑）店を出ることにした…

「俺は、ああいうの嫌いなんだよねサービス業なんだから、早く帰りたいのはわかるけど、あの態度はないよな」

『…でもあたしが店員なら同じかも…（笑）』

「…そうかなあ違うと思うんだけどなあ」

…彼は思ったことをはっきり言う…

そこもあたしと正反対だ…

「…そういえば、機嫌治ったねじゃあそろそろ帰るかい？」

『…その方がいい？』

「いや…俺はまだまだ付き合えるし、まだ一緒にいたいけれどさ…お前には彼氏も親もいるからね…」

『…そうだよな…でも…どうしたらいい…？』

「…それは、ズルいよちゃんと自分で決めなよ？自分の考えで動きなよ？俺は合わせるよ」

『…え…っそれもずるくない？』

「ずるくないよだって俺は”自由”だもの」

…その”自由”というフレーズに、心が震えた…

あたしはなんて”不自由”なんだろう

先輩からよく聞かされた「尾崎」を思い出した…

「自由になりたくないかい熱くなりたくはないかい」

…”自由”になりたい

あたしはたった一度だけ、「自分」を「信じる」ことにした…

9

自分の顔だったり、性格だったり…「自信」ある人なんて、あまりいないよね？

…あたしもそう…

まして、環境が環境だから、自分さえ信じられなくなって…

…だけど、こんなあたしでも必要としてくれる人がいて…それが今の彼なの…

と、一息で話して…

自分のカンを信じて、今はオシャレなバーにいる…

…すごく、彼が大人に見える…

あたしの初めてのお酒は、「ファジーネーブル」

全然種類がわからなくて、「とりあえず生」と言っただけを、軽く笑って『生もいいけど、女の子におすすめのカクテルがあるから、それにしてみない？』と優しくエスコートしてくれる彼…

あたしはついひねくれた気持ちになり、彼にふざけて言った…

「こつやって何人口説いたんですか？」

『…お前なあ…確かにここはたまに来るけど、いつも一人だよ連れてきたのも、お前が初めてだ…』

「そうなのいやゝモテそうだからさ優しいしね…すごく慣れてる感じだし…」

『あいにく、優しくもないしモテねえよ（笑）余裕なんかないしさ…だって今だってすごく心臓がドキドキしてるし…ホラね？』

彼に手を引つ張られて、彼の胸に当てられる…

…確かに早い気もするけれど…あまりわからない…

「あまりわかんない」

と言いながら、あたしは彼の正面から隣に座った…

…もちろん手は繋いだまま…

『えつちよおま』

「…なんか近くにいたくなって…」

…あたしには、あたしの中には、黒い生き物がいる…
何もかも手に入りたい…尽きない欲望の様な、黒い仮面…その名前は…”本能”だ…

少し慌てる彼を、冷静に判断するズルイあたし…

彼の代わり？とかじゃなくて「愛されることの気持ちよさ」に気付いてしまった…

彼の好意を裏切りながら、またわかってるのに騙されながら…二人はお互いの暗黙のタイミングで…唇を重ねた…

もう止まらなくなった感情を抑えられず、今日初めて会ったのに…体も重ねてしまった…

…ただ彼は、ひどかった…

最中にも、「彼氏いるのに」「彼氏かわいそう」とか…言ってた…なら、抱かなきゃいいのに…と思いつつ、目の前の優しさにすがりつく、あたしは汚い女だ…

一度だけの「賭け」は、あたしの「女」の部分を膨らました…

…ごめん…あたしは弱いし、ズルいよ

声も届かない「彼氏」に、心の中で謝って…またあたしは汚れていった…

10

あたしの中の小さな女の子…

泣き虫で、弱くて、甘えたがりで…

今、思えばそれが「良心」だったのかなあ？

一度、クセがついてしまうと止まらない…

欲望なんていくらでも大きくなるし…

男なんてみんな「バカ」に見えた…

「体」を預けておけば、みんな優しくしてくれる…

家になんて、いたくなかったあたしは「自分」を使い、渡り歩いた…

…そう、まるで波に舞うハンカチみたいに、揺れて、流されて…

…ワガママにもなった…

どうしても「彼氏たち」が捕まらないと、街に出て獲物を探した…

埋められるなら、誰でもよかった…

退屈もスキマも…

そして、おとなしかったあたしは、どんどん派手になっていった…

慣れない化粧をして、街に立つ…

まるで「コールガール」だ…

化粧は演じるための「スイッチ」だ…

本当のあたしは、小さくて臆病だから…

紅をひいたその瞬間から、あたしはただのパイロットになる…

「あたし」という入れ物を操るためのね…

でもそんな「幸せ」な時間も長くは続かなかった…

…そう、子どもができてしまったんだ…

…生理がこない…

あたしくらいの歳だって、容易に想像はつく…

あたしは、街はずれのドラッグストアで検査役を買って、そのト

イレで調べた…

「何かの間違いでありますように…」

…神様と時間は、どんな人間にも平等で…無慈悲だ…

「おめでた」なのに「残念」な気持ちになり、あたしは自分の惨めさが滑稽になり…笑った…

その時期に関係をもったのは、一人だけ…

その夜、早速その彼氏に相談に行った…

「ねえできたんだけど」

『はあ？ナニが？…ってまさか』

「…子ども…」

『…マジかよ』

「産むつもりはないから、お金ちょうだい」

『…って証拠は？俺の子どもじゃないかもしれないじゃん？』

「いや、あんたしかいないし」

『…信じられないな…だって、今日だってかなり久しぶりだろ証拠だってないしさ…騙して金を取ろうとしてるんだろとりあえず帰れ

『よ

「…帰れるわけじゃないじゃんその時期はあんたとしかしてないし、あんたしかないんだから」

『…マジ、めんどくせえよお前…たかだか何回かしたただけなのによマジでウザいから帰ってくれない？』

…「バカ」なのは男だけじゃなくて、あたしもだった…

あたしは野良猫みたいに、路地裏で泣いた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5934s/>

球根

2011年10月8日10時15分発行